

# 大日比所藏の円戒曉示鈔に就いて

千賀真順

日本に於ける円戒戒は伝教大師が入唐相伝し（ハの四）、慈覺・長意・延昌・尋禪・源心・禪仁・良忍・教空・源空と伝承せられた。（賢淨土伝戒論、教山説戒問書、円戒曉示鈔等）。法然上人は円戒中興の祖として自身戒徳無比、且つ後代に遠大なる感化を与えて戒の門業が盜梁を極めた史実は際にくれを伝え、「賢淨土伝戒論」、「宗派流伝」、「円戒聽書」等には伝戒者として辨長・信空・證空の三流を挙示している。これらの伝戒者は嫡々相伝を弘宣して、時には教山に説戒を行ひ、又戒疏を講伝する程の教績を占め、特に南北朝時代、足利争亂の暗雲低迷の時に、梵風を送つて道俗を驚覺した戒書として、円戒曉示鈔が注目せられる。

大日比所藏の円書は法洲上人（一七六五—一八三九）の書写せられたもので、表装は紺色、見るからに神肅な氣分に打たれる。上下二卷の合本となつてゐる。その卷頭に

應安三年<sup>庚戌</sup>二月六日 於廬山寺始之卷起極樂坊法印興幸四阿地蔵坊法印快運幸承堅者

眞理論師志玉

とある。即ち應安二年（一三六九）二月極樂坊興幸が發起し、快運、眞理、志玉、幸承が円圖して、廬山寺に於て円戒の講を開き、後幸承等が筆録したもので、「円戒聽書」又世に「戒疏廬談」

と採するものである。「津土教の研究」に望月博士が、「元祖上人と円戒の系統」(六六二頁)に就いて論明され、その講者は恐らく是れ仁空與尊に非ざるかと推定せられてゐる。「仏書解説辞典」には半承録のみを記して著者は挙げてない。この講者に關して本書の與書に與本、同本の與書を載せてゐる。即ち此の如くである。

### 與本與書

「當長老與尊上人至元祿五壬申三百廿二年

應安四年癸卯年五月七日於廬山寺對後師上人終切畢

円円頓戒畢可有沙汰處當世結緣受戒之外不及戒体戒行鑽仰之糸無念至極也仍極樂坊爲  
起象去年春頃御談義雖有之余殘多之今度然切宿習之至喜悅之外無他者也一得永永  
失者円頓之規模也即入諸公位者我等所證也舍却血脉符伝即身成仏願于茲我願衆滿衆望  
亦是可秘云云々

天台沙門無障金剛

年承  
福三十三

二月八日

享徳元年壬戌九月十六日於本院南谷常光材書

同本云

文明十三年正月十日於本院東谷定老院令書字畢

探頭 法印慶意

成廿六  
歲四十九

造抄者円戒之深底當流之與源也予年来之大望更無他事令懸望山門還如藏之御本逐字切畢  
却函衣而不可出庫外者也

時延宝六戌午年初冬十二月後召菩薩比丘應空謹書

(元祿十二年十月十四日遷化)

後日令校合尚可虫食之文字等者也

私云重前以古本令校合政訛文字并撰落等畢

宣永二乙酉年五月十日以古本一校畢 台空

これによるに本書は慶應、飛空、台空等が伝々書字校合したものを法洲上人が書写されたもので、法洲上人は異本をも披見された如くである。その異本の奥書によると講者は東導であると指摘し、且つ應安三年二月六日に始講したものを同四年五月七日に幸承が親しく東導に就いて両敲補訂して切を終ったのである。末尾の二月八日の記は應安三年か同四年かは明了でない。併し前後の事情から推定するに同四年二月八日に筆切を終ったと見るのが適切であろう。

本書の内容について略言すると上巻——一、四戒所依畢、二、戒菩薩戒回異畢、三、戒心戒体畢、三、重五戒の畢、四、戒体失不失畢、五、菩薩戒相伝畢、の五章。下巻——一、四戒教主畢、二、受戒授戒畢、三、菩薩戒々師畢、四、大小二戒回異畢、三、同歩同畢在之、五、通受別受畢、他流灌頂無本説畢、の五章を説き、又本書名の由來する所は、

慶示鈔者天台云指掌曉示令後生取悟為易云々

とある。

〔經來語には東伝とあり、

本書の諸者東導（——一三七六）に就て珍養の「養血歌」（廬山寺本）によると——飛空——證

空——極空——承空——<sup>東導</sup>飛空——<sup>東導</sup>仁空——<sup>東導</sup>辨空——と次第し、「廬山説戒問書」には、法然上人、

善惠上人、極空上人、<sup>（示導）</sup>飛空上人、廣惠和尚とあり、西山三鈔寺伝持次才（宗派流伝）には南山源等

上人、<sup>（示導）</sup>辨二觀快法橋、才三慈鎮和尚、才四善惠上人、才五靜証上人、才六立信上人、才七遊觀上人

、才八永導上人（康聖号淨土院諸号太惠大和尚、後醍醐院国師云々）才九示導上人、才十東導上

人（仁空号淨行庵坊院四應和尚）とあり、本山義の示導（一三三七）の法燈を継ぎ戒淨二門を  
高揚して東学戒学の振興に力を致し、戒淨雙修の教切を擧げてゐる。就中戒學に於て本書の外、  
叡山説戒問書一卷し、「菩薩戒義記問書十二卷」等の名著を後學に残してゐる。本書は世に盛談と  
稱せられてゐる。戒學晉堂石の宝典である。

（浄土學研究所副主任）